

小麦・えだまめ1年2作体系におけるえだまめ栽培法

(農試 県南分場)

1. 背景とねらい

小麦大豆1年2作体系(文献1)は、晩播大豆の成熟期が遅れるため、県南地域の一部に適用が限定されている。一方、野菜生産拡大が県の目標とされており、県南地域では転換畑への野菜栽培導入方策が求められている。その中でえだまめは現在日本一を目指している。そのため小麦大豆1年2作体系にえだまめ栽培を検討し、以下の成果が得られたので指導上の参考に供する。

2. 技術内容

(1) 小麦・えだまめ1年2作体系

小麦収穫後のえだまめ栽培に必要な積算平均気温は、サッポロミドリで1450℃、ふくらで1450~1510℃、錦秋で1600~1850℃程度である。これより小麦休閑期積算平均気温1800~1850℃以上の地域では小麦・えだまめ1年2作体系が可能である。7月20日までの播種で9月下~10月上旬にえだまめが収穫できる。

(2) 小麦跡えだまめ栽培法

- ① えだまめ栽培も輪作が必要であり、田畑輪換の効果も高い。また麦稈は地力維持のため全量鋤込みとする。
- ② 小麦跡のえだまめ栽培では、麦稈の分解促進及びえだまめの初期生育確保のため、基肥窒素は成分10kg/10aとする。
- ③ 増収のためには密植が有効であるが、1莢重及び莢色が低下するので栽植密度は5千~1万本/10a程度にとどめる。
- ⑤ 雑草防除と生育増進を図るため培土を行うのでマルチは原則として使用しない。
- ⑥ 手もぎでは大面積消化は不可能なため、莢もぎ機の使用を前提とする。

(3) 適用範囲：ほぼ盛岡以南の平坦部とする。

3. 普及指導上の留意点

(1) 大豆栽培技術からの応用として、LP70(N6kg/10a)を培土直前に全面散布し、培土により作土に混合すると増収し、莢色も濃くなる。

(2) 小麦栽培面積が大きくえだまめだけでは休閑期を埋めることが出来ない場合、気象的に小麦大豆1年2作体系が可能な地域では、残りの面積にこれまで通り大豆ワセズナリを作付する。しかし不可能な地域では残りの面積に緑肥を作付することが小麦の雑草防除と増収のために有効である。

(3) 小麦収穫後速やかな播種並びに一層の省力化を必要とする場合には、晩播大豆で開発した不耕起栽培も可能である。

(4) えだまめは大豆よりもウイルスに弱いため、大豆以上にアブラムシ防除には留意する。

4、当該事項にかかる試験研究課題名

岩手県で育成導入した1977品種系統の多収栽培法の確立

5、参考文献

- 1) 東北2毛作限界地帯における小麦・大豆1年2作体系技術の確立(1985)、岩手農試研報,25,145-162
- 2) 岩手県における小麦、大豆を基幹とする新体系化技術に関する研究、第18報、1年2作体系への枝豆栽培導入の意義、(1988)東北農業研究
- 3) 「県北地帯におけるえだまめの作期別生育特性」昭和61年度参考事項
- 4) 「小麦跡晩播大豆の不耕起播き栽培法」昭和61年度参考事項
- 5) 東京青果物情報センター(1985-1987)青果物流通年報、野菜編

6、試験成績の概要

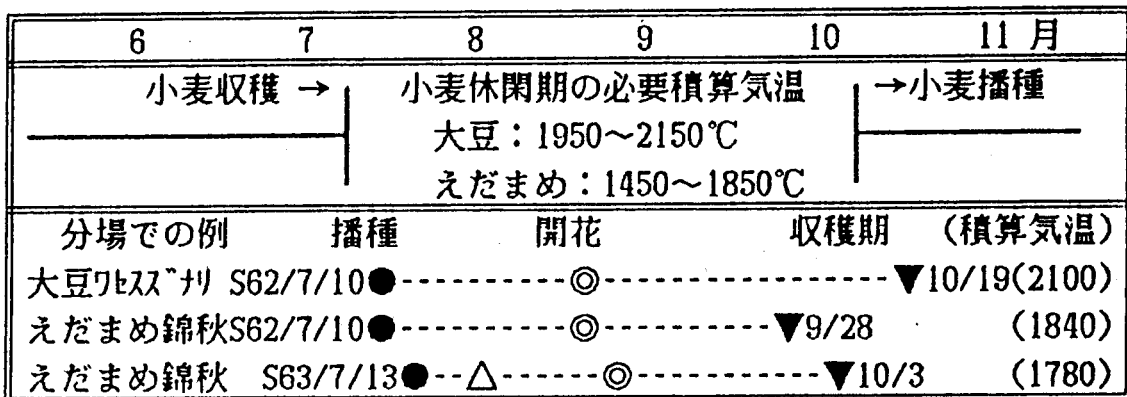


図1 小麦大豆1年2作体系と小麦えだまめ1年2作体系

表1 昭和62年度小麦跡錦秋での作付体系、LP追肥効果

土地利用	LP追肥	主茎	全重	稔実	有効 [#]	莢粒数比率(%)			有効	
		長 cm	— kg/10a	莢重	莢重 同左	同左 指数	1粒	2粒	3,4粒	百莢 重g
A. 転換畑	0	60.0	1869	771	651	100	25	63	12	324
	NG	55.7	1929	826	712	109	22	63	15	337
B. 輪換畑	0	66.8	2653	951	791	122	27	60	13	328
	NG	69.4	2692	1030	867	133	24	63	13	324

[#]有効莢は2粒以上莢、

A.=2毛作連続跡、B.=同左+水稻跡、麦稈はいずれも全量鋤込み

基肥：10-10-10(N-P₂O₅-K₂O kg/10a)、機械播種(1987/7/10)

栽植密度：65cmx約15cm(2粒)約15本/m²、手もぎ調査(1987/9/28)